

クチトシ・クチハヤシ・シタドシの語誌： シタハヤニの成立まで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1446

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



クチトシ・クチハヤシ・シタドシの語誌

——シタハヤニの成立まで——

吉 田 光 浩

一 はじめに

王朝貴族社会においては、歌の贈答をめぐって、人々のさまざまな哀歓が繰り広げられる。贈られた歌に対する返歌が早いことは、歌の内容もさることながら、当時の貴人にとって大切な素養であった。そのような歌のやり取り、受け答えの早さをめぐって用いられる語にクチトシがある。現行の辞書におけるこの語の扱いをみると、『小学館古語大辞典』△昭和五八年版▽では次のように記述されている。

①返事や返歌がひまどらないで、すぐに口をついて出てくるさま。受け答えが早い。

②軽率にものを言うさま。すぐに口をはさむさま。

また同書「語誌」の欄には、「類義語『くちはやし』には、語リ口が早い意があるが、この語にはない」とあり、類書もおおむねこの記述に従うものであるが、クチトシに「早口である」意を認めるものもみられる（例えば『日本国語大辞典』△昭和四八年版▽）。また、この「早口」の意をもつものとしてはクチハヤシの他にシタドシ（シタドニ）がみられ、後にはシタハヤニなる語形が生み出されるようである。これらの語は、通史的にみれば、各々がクチトシ―クチド（クチト）、クチハヤシ―クチハヤ、シタドシ―シタドのように、対応する形容詞形と名詞形（形容動詞形）を備えており、また、対

立構造が捉らえやすい対義語をもつことなど、^(注1)比較的整然とした語彙体系をもつ様子を窺うことができる。

本稿は、このように語形・語義において一部で重なり合う部分をもつ複合形容詞クチト(シ・ニ)・クチハ(バ)ヤ(シ・ニ)・シタド(シ・ニ)△以下、特殊な場合以外は形容詞形をもつてその代表とする▽を中心に、古代から近世初期までの語例を検討することによって、類義語シタハヤニが成立するに至るまでの類義関係の素描を試みるものである。

二

まず、上代の文献に、クチトシ・クチハヤシ・シタドシの例は、『万葉集』をはじめ、記紀などにも、確例と思われるものは、見当たらないようである。これらの語の場合のクチ・シタが示すものは、身体部位としてのそれではなく、「言語」の意と考えられるものであるが、『時代別国語大辞典—上代編—』(三省堂)には、見出し語「シタ(舌)」の項目の「考」欄に「シタをもの言うこと・言語の意味に用いたと考えられる例は見当たらない」とあり、シタドシが上代に用いられた可能性はきわめて薄いことを窺い知ることができる。一方、クチについては、「玉釋かけぬときなく口やまず」(万葉集・一七九二)などの例にみられるように、直接ではないが言語行為に関わる意でクチが用いられており、クチトシがすでに成立していた可能性が残されるのであるが、複合形容詞自体を多く見出し得ない上代語においては、やはりその可能性もきわめて薄いものと考えられる。阪倉篤義氏は、書紀古訓を対象に複合形容詞について調査されており、「この古訓中、複合形容詞とみとむべきものは、三〇語例ほどで、(中略)その数ははなはだ少ない」と述べ、それぞれの語例を掲げられた(『語構成の研究』第四章第三節四五頁)。そのうちには、ココロヨシ・カホヨシなど、身体語を含むものは見出し得るが、口・舌を構成要素として含む語は、やはりみられない。したがって、以上のことを考え合わせると、これらの複合語の成立は、いずれも平安期以降とするのが穏当と思われる。

これらの語が資料上に見出だされる比較的早い例には、次の『新撰字鏡』の記述を挙げることができる。^(注2)

諺 口止之又口加留之

ここでは、「諺」字にクチトシとクチカルシの訓注が記されており、クチトシがクチカルシの類義語として「軽率に口外する」意ですでに用いられていたことを窺い知ることができる。また、音構成の面では、ここにみられるように連濁せず、清音で構成されていたようである。

さて、この期の古辞書類には、『字鏡』以外にクチトシ・クチハヤシ・シタドシの例は見当たらないのであるが、和文には、『源氏物語』など、ごく限られた資料のなかで偏在的に用いられているようである。

A (式部) 「ささがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせと言ふがあやなさいかなることつけぞや」と、言ひもはせず、走り出ではべりぬるに、追ひて、(女) 「あふことの夜をし隔てぬ仲ならばひるまも何かまばゆからまし」さすがに口とくなどははべりきと、しづしづと申せば、
(源氏物語 はゝき木)

B (惟光) 「もし見たまへ得ることもやはべるとはかなきついで作り出でて、消息など遣はしたりき。書きなれたる手して、口とく返りごとなどしはべりき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなんはべるめる」と、聞こゆれば、
(源氏物語 夕がほ)

C またさて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。もののたよりばかりのなほざり言に、口とう心得たるも、さらでありぬべかりける、後の難とありぬべきわざなり。
(源氏物語 こてふ)

D (浮舟) 「はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二もとの杉」と手習にまじりたるを、尼君見つけて、(中略) (尼君) 「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」ことなることなき答へを口とく言ふ。
(源氏物語 てならひ)

E 少将のなきをりに見すれば、心うしと思へど、かく思し出でたるもさすがにて、御返り、口ときばかりをかごとに

て取らず。「ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜に結ほはれつつ」手はあしげなるを、紛らはし、ざればみて書いたるさま、品なし。
 (源氏物語 夕がほ)

F と言ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、くちとくうちつづけなどしたまふ。

(源氏物語 ところなつ)

例AからEまでは返歌・消息などの受け答えが早い意の例としていずれも問題はない。例Fは、近江君の言動を描写する場面にみられるものであり、「早口」の意と解せなくもないが、「本末あはぬ歌：うちつづけ」の部分からこのような句を矢継ぎ早に口にしたことを示すものと考えられ、それが「いと言ふかひなくはあらず」と評価されているのであり、やはり、これも歌句から歌句までの間が短いことを表している例として捉えることができる。したがって、「早口」と解すべき例はこれらのうちから見出だすことはできない。

一方、『角川古語大辞典』のクチトシについての記述には、「おおむねほめる意で用いている」とあり、時代は下るが「時代別国語大辞典―室町時代編―」(三省堂)では、「對話などにおいて、すばやく適確に反応して話すさまである(傍点筆者)」とあり、反応時間の短さを表わすだけではなく評価の意味を担っていることを示す記述がみられる。もっとも、この時期における返歌等の早さは、貴人にとって必要な素養であったのであり、その意味において『角川古語』に記された「ほめる意」の記述は妥当であると考えられるのであるが、それがこの時期に、後代の『室町編』の記述にみられるような内容的確さまで要求するものであったか否かについては、検討を要する。ここで挙げた例A・Bには、「さすがに」あるいは「いと口惜しうはあらぬ」などの記述があり、それらの返歌が内容においても的確で優れているものと理解されるのであるが、E・F二例については、「かごとにてとらす」「手はあしげなるを：品なし」および「本末あはぬ歌」などの記述から、明らかに内容的に的確な返歌であるとは言いがたい。したがって、中古におけるクチトシは、『源氏物語』の例をみる限り、「早口」の意はなく、「返歌・消息などの受け答えの早さ」についていう語として用いられてお

り、その反応が早いという意味においてプラス評価を伴う語ではあるが、その内容の的確さについてまで評価するものとは言い難い。

この他の中古和文にクチトシは、ほとんど用いられていないようであるが、やはり「返歌の早さ」について用いる類義語クチハヤシが、同じく『源氏物語』に一例のみ用いられている。

G (宰相の君)「折りて見はいとどにほひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花」口はやし、と聞きて、(薫)「よそにてはもぎ木なりとやさだむらんしたに匂へる梅のはつ花さらば袖ふれて見たまへ」など言ひすさぶに、

(源氏物語 たけ川)

クチハヤシは、先において述べたように、「早口」の意も表し得るが、この例にみられるように返歌の早さについて用いることもあり、クチトシの類義語である。しかしながら、この語には、クチトシのように「軽率にものを言う」意は現行の辞書の記述に見出だし得ない。そこで今しばらくクチトシ・クチハヤシの関係について検討しておこう。

H 亦、彼持経者、極テロ早クシテ、一月ノ内ニ必ズ千部ヲ誦ス。

(今昔物語集 卷第十三 「蓮長持経者、誦法花得加護語 第二十八」)

I 極メテロ早クシテ、人ノ一卷ヲ誦スル程ニ、二三部ヲゾ誦シケル。

(今昔物語集 卷第十七 「僧貞遠、依普賢助通難語 第四十一」)

J 然テ本ノ郷ニ返ルママニ、然許誓言ヲ立テ云シカドモ、信无ク口早カリケル僧ナレバ、何シカ会フ人毎ニ、此ノ事ヲ語リケレバ、

(今昔物語集 卷第三十一 通大峯僧、行酒泉郷語 第十三)

K 然レバ、人ノ不信ニテロ早キ事ハ努々可シ止ム。亦譬ヒ僧口早クシテ語ルトモ、行ク者共糸愚也。

(今昔物語集 卷第三十一 通大峯僧、行酒泉郷語 第十三)

もちろんこれらの「口早」を単純にクチハヤシの例と速断することには、問題があり、他の読みが成り立つ可能性についても検討しておく必要がある。馬淵和夫監修『今昔物語集文節索引』（笠間書院）では、卷第三十一の例J・Kに見られる三例をクチトシの見出し項目で、また卷第十三(H)および卷第十七(I)の例をハヤシの見出し項目で（すなわちクチハヤシの例として）、各々扱い分けている。これは、卷第十三(H)および卷第十七(I)の例が、いずれも「早口」の意を表す例と考えられるものであることに對して、卷第三十一(J・K)の場合は、いずれもクチハヤシには認められていない「軽率に口外する」意で用いられていることを根拠に判断された結果であろう。但し、「トシ」の漢字表記には、上記の例がみられる卷第十三・十七・三十一において、それぞれ「心疾クシテ」（卷第十三・第二十三）、「耳利クシテ」（卷第十三・第二十五）、「父ニハ疾ク送リテ」（卷第十七・第一）、「今ノ妻「物疾ク参レ」ナド云フ」（卷第三十一・第十）のようにトシと読ませる「疾」「利」がみられ、『今昔物語集』においては、一応それらと「早」字との間に使い分けがあるように見受けられる。したがって、卷第三十一の一部の例の場合にのみ「早」字を「ト(シ)」と読むことには疑問も残るのであるが、クチハヤシに「軽率に口外する」意で用いられた確例が見当たらない限り、今は、卷第三十一の例をクチトシと考えるのが穩当であろう。

ところで、クチトシの類義語、クチハヤシにみられるような「早口」の意は、クチトシと似た語構成をもつシタドシによっても表されている。(この語は、一般に連濁を起こした語形で用いられることが多かったようである)

L 五節の君とて、ざれたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、(近江君)「小賽、小賽」とこふ声ぞ、いとしたどきや。

(源氏物語 とこなつ)

『源氏物語』には、この例の他、以下のように形容動詞形シタドニおよび名詞形シタドサがみられ、いずれも「早口」の意で用いられている。

M (近江君)「舌の本性にこそはべらめ。幼くはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当

大徳の産屋にはべりける、あえものとなん嘆きはべりたうびし。いかでこのしたどさやめはべらむ」と思ひ騒ぎたるも、

(源氏物語 ところなつ)

N (内大臣)「かくてものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。こと繁くのみありて、とぶらひ参うでずや」とのたまへば、例のいとしたどにて、(近江君)「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。年ごろおぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常に見え見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬ心地しはべれ」と聞こえたまふ。

(源氏物語 ところなつ)

O (右大臣)「中将、宮の亮などさぶらひつや」など、のたまふけはひのしたどにあはつけきを、大將はものの紛れにも、左大臣の御ありさま、ふと思しくらべられて、たとしへなうぞほ笑まれたまふ。(源氏物語 さか木)

また、『源氏物語』以外では、『狭衣物語』において、同様に「早口」の意と解釈されるシタトクの例が認められる。

P (母代)「珍しき御けはひこそ。思し召し違へさせ給ひけるにや」とて、「吉野川何かは渡る妹背山人だのめなる名のみ流れて」と、げに「ばっばっ」と、詠みかくる声、したとく、のど乾きたるを、

(狭衣物語 卷一)

以上のようにシタドシはいずれも「早口」の意で用いられており、また、これらの諸例を検討すると、クチトシとは異なり、シタドシはマイナスの評価性を伴いやすい語として捉えられる。早口で話すこと自体が尊ばれなかった時代において、舌疾きことが評価されなかったことは自明のことであろう。

以上のように、中古においては、クチトシ・クチハヤシ・シタドシ(ニ・サ)が各々偏在的に散見されるのであるが、多くの例を見出だすことはできない。それは、これらの語が比較的語義の範囲を広くもつ単純語とは異なり、その範囲がかなり限定されている複合語であることもその一因として考えられる。

三

中世に入るとクチトシ・クチハヤシ・シタドシなどクチトシの周辺語は、古辞書や説話などの他に、古注釈、連歌関係資料のなかで、わずかながらその姿を散見することができるようになる。

古辞書の中では、『類聚名義抄』や、多くの古本節用集にはこれらの語についての記述がみられないものの、増補が著しい『文明本節用集』には、「慥」に連濁を越こした語形であるクチバヤシの和訓が記されている。また、時代は下るが、延宝八年（一六八〇）に刊行された『合類節用集』には「利口」にクチバヤキの訓が、また同年に成立した『節用集大全』（恵空編）には、「陰」にクチハヤシの附訓がみられ、資料により連濁のあるものとなないものがみられるようである。『日葡辞書』では、クチトシは見出し語として採用されていないが、次例のようにクチバヤイ・クチバヤニ・クチバヤナが採録されており、『文明本節用集』『合類節用集』の例と併せ考えるとクチハヤシは、当時、連濁した語形で用いられることが普通であったものと推測される。

Cuchiba. クチバヤ 生まれつき早口に話す者。

Cuchibayai. クチバヤイ 同上。

Cuchibayana. クチバヤナ 非常に早口で話す（者）。

Cuchibayani. クチバヤニ 副詞，例，Cuchibayani monouo yû. 早く流暢に話す。

（注釈部分は、土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』による）

しかしながら、清音表記を採用した『節用集大全』は、基本的には音の清濁について詳しく区別した資料と考えられており、単純に、濁音が表記されなかっただけで編者恵空が採用した連濁しない語形クチハヤシは実際にはありえなかつ

た、とは言い難い。また、時代的にも『日葡辞書』は『節用集大全』におよそ八〇年先行するものであり、この間に連濁語形／清音語形のような逆行的变化があったとは、当然考えられない。ここは、むしろ恵空を含む叡山の学僧達が用いていた伝統的な読みはクチハヤシであったが、一般には、むしろ早い時期に連濁を起こした形で用いられていたものと考えるべきであろう。

この他に『日葡辞書』では、クチバイイ・クチバヤナ等と類義で現代語において普通に用いられるハヤクチの語形も採録されているが、

Fayauchi. ハヤクチ 早口に話す人。

Fayauchini. ハヤクチニ 副詞、例、Fayauchini monou yû. 口早に話す。

この語形は、すでに『運歩色葉集』にも「早鐘・早口・早流」のごとく採録されており、現代語ハヤクチにつながるものとして注目される。

また、連歌関係の資料には、紹巴作と伝えられる『匠材集』にクチトシ・シタトニおよびクチカロナルが集録・注解されている。

くちとく 口のさとき也口利とかく也

したとに 舌のはやき事也又したとき共

くちかろなる かるくしく物いふなり

ここに採用されたクチトクの注釈部分には、クチカルシに通ずる「軽率に口外する」意は示されておらず、クチカロナルとの類義関係を窺い知ることはできない。しかしながら、この期の説話資料によれば、この語義による例は「口のさとき」意のものよりも容易に見出だすことができるようである。

Q 「此木ハ桜木カ」ト問セ給ケルニ、タ、ウチ畏リテモナクテ、口トク、「桃ノ木ニテ候」ト申タリケレハ、オト、

ウチエミテ、「棹サケテ参ラハヤ」ト有ケル、イト恥シカリケリ。(十訓抄 上・第二)

R 或人云、人ハ思ンハカリナク、云マシキ事ヲクチトク云出シ、人ノ短ヲソシリ、シタル事ヲ難シ、カクス事ヲ顯シ、恥カマシキ事ヲタ、ス。此等スヘテ有マシキワサ也。(同・第四)

S 是ハカク程有ヘシトハ思給ハサリケレトモ、サハカリ思ハム身ニテ、何トナク口トク難セラレタリケル、イト不便ナリシカ。(同・第四)

これらの例に加えて、先に検討した『今昔物語集』の「口早」表記のうちクチトシと読まれる可能性のあるものがいずれも「軽率に口外する」の意をもつものであったことも併せ考えると、中古から中世にかけて説話にみられるクチトシの用法は、「返歌・消息などの受け答えが早いさま」よりもむしろこの語義による例に傾くものと考えられる。しかしながら『匠材集』にみられるクチトシの記述に「軽率に口外する」意が示されていないのは、その編集目的が連歌に用いる雅語の注釈に重点がおかれていたためであり、説話での例を網羅するところになかったことが原因であろう。したがってこのような、説話の諸例と雅言を対象とする資料の記述を併せ検討すると、この語には、雅俗の間にある程度の語義の相違がみられたのではないかとの推測が成り立つ。また、このような雅言の注釈書における語義のステレオ・タイプな把握は、中世以降のクチトシおよびその周辺語の意味の形成に、その後かなり大きな影響を与えることもあったものと考えられる。とりわけ、この時期には『源氏物語』など、中古の和文学作品についての注釈などの研究がさかんであり、クチトシなどはそのような研究の中でこういった把握の方向付けがなされていた可能性が高い。

ゆえに、ここでは、しばらく『源氏物語』の古注釈のなかでどのようにこれらの語が把握されていたのかという問題について若干の考察を試みておくことにする。(表―1参照)

表―1は、先に中古の箇所を検討した『源氏物語』のクチトシ・クチハヤシ・シタドシ(シタドニ・シタドサ)の諸例が、室町中期から江戸初期にかけておこなわれた『源氏物語』古注釈のなかでどのような語を用いて注解されているかを

表一

『源氏』本文	紫名抄	河海抄	松永本花鳥余情	細流抄	休閑抄	孟津抄	岷江入楚	源氏綱目	萬水一露	源氏物語湖月抄
クチトク (本稿中例A参照)					○くちはやか		○くちとく			○返歌など早 くせし
クチトク (同例B参照)									○口とく	
クチトク (同例C参照)		○返事とくし たる		○くちとく		○返事とくし たる心			○口とう	
クチトク (同例E参照)									○口とく	
クチトク (同例F参照)									○くちとく	
クチハヤシ (同例G参照)				○口とき		○哥をはやく よむ	○口とき			○口とき
シタドキ (同例I参照)		(引用本文の 「シタトキ」の傍 書アリ)				○舌はやに	○舌とき	○舌はやに		
シタドサ (同例M参照)			○したはやに			○舌とき	○舌とき	○舌とき	○舌とき	
シタドニ (同例O参照)	○舌早	○口早(シタ ト)			○舌早	○舌はやに	○舌とき	○舌早(した ど)	○舌とき	○舌早
あはつけき声さま に(本稿引用例ナ シ全集第3巻 P239)							○舌とき			
大乗そしりたる罪 にも数えたるかし (同引用例ナシ 同第3巻P236)									○そしりたる 故に今舌は や成	
声のあはつけさと に(同引用例ナシ 同3巻P234)					○舌のはやき	○舌はやに			○舌とに	○舌早なる

※クチトシとその周辺語の注釈に対応する語（句）のみを記載し、他は省略した。

※附訓のみられるものは（ ）内に示した。

※河（『河海抄』・細（『細流抄』）など先行する注釈書の出典等に関する情報は記載しなかった。

※各語の活用形は原文のまま掲出した。

※『源氏物語』本文にクチトシ周辺語が含まれる場合でも、注釈内容がクチトシ周辺語の解釈に無関係と思われるものはとりあげなかった。

※『源氏物語』本文にクチトシ周辺語が含まれない場合でも、（例えば「あはつけき声さまに」の部分など）各注釈書に周辺語が用いられている場合は、できる限りとりあげた。なお、その場合の『源氏』本文は『日本古典文学全集源氏物語』による。

一覧できるようにしたものである。ここで扱った古注釈は、『紫明抄』『河海抄』（以上、玉上琢彌編『紫明抄河海抄』角川書店・昭和四三年による）、『松永本花鳥余情』『内閣文庫本細流抄』『休聞抄』『孟津抄』『岷江入楚』『源氏綱目』『萬水一露』（以上、伊井春樹他編『源氏物語古注集成』桜楓社・昭和五年―平成七年による）・有川武一校訂『増訂源氏物語湖月抄』（弘文社・昭和二年による）である。断片的なものから『岷江入楚』のように他書を集約したものまでが含まれていたり、重複する点が見られるものではあるが、室町中期から江戸初期にかけて当時の知識層におけるクチトシとその周辺語の把握のされ方を、ある程度ここから読み取ることができるものと考えられる。

表―1から読み取れることは、まず、『源氏物語』本文にクチトシ・クチハヤシがみられる部分の注釈には、おおむねクチトシを対応部分に用いていることである。先に検討したように『源氏物語』のクチトシ・クチハヤシの例は、いずれも「返歌・消息などの受け答えが早い」意で用いられたものであったが、若干ながら「返事とくしたる」（『河海抄』・『孟津抄』）あるいは「哥をはやくよむ」（『孟津抄』）・「返歌など早くせし」（『湖月抄』）のような記述や、「くちはやかに」（『休聞抄』）のようにクチトシを用いない、かみ砕いた表現で注釈されている場合もみられるが、『細流抄』『岷江入楚』『萬水一露』などでは、いずれもクチトシを用いて注釈をおこなっている。これは、この頃「返歌・消息などの受け答えが早い」意を表す語としてクチトシが古注釈を享受した知識層に通用されており、その表現として最も適切であると考えられていたことを示すものであろう。

一方、「早口」の意を表すシタドシ（シタドニ・シタドサ）の場合、どのような語を用いて注釈されているかをみると、そこにはクチトシを見出だすことはできず、この時期にも、クチトシとシタドシの混用はみられない。シタドの注釈には、シタドシ・シタドニをそのまま用いているものもあるが、『松永本花鳥余情』では、「シタハヤニ」、また『孟津抄』『岷江入楚』『萬水一露』では「舌ハヤニ」、『源氏綱目』には連濁を起こした「舌バヤニ」の語形が、各々散見される。しかしながらシタハヤあるいはシタバヤの語形は、『類聚名義抄』および古本節用集、『日葡辞書』などこの頃の辞書類には見当たらない。

表記の上からシタハヤ・シタバヤと読まれる可能性のある例については、『紫明抄』に「舌早」（傍訓なし）がみられる。また、『紫明抄』の成立後しばらく後に成立したと考えられる『仙源抄』には、「したとに舌早也」という記述がみられ、シタドの注釈として「舌早」が用いられている。これらは、そのままシタドと読まれた可能性も考えられるが、訓のある「舌早」の例は、『河海抄』に「舌早也」とあり、また振り漢字ともみられる次例のようなものもみられる。

○すくろくうち給ふいとせちにをしもみてせうさい／＼とこふこゑそいとしたときや^{舌早}

（河海抄）

この他に後代のもののなかでは『源氏綱目』に「舌早^{したど}」の例がみられる。これは、『河海抄』など前代の注釈の記述内容の影響が強く認められるものと考えられる。また、先にとりあげた『今昔物語集』の「口早」をクチトと読ませた可能性も考え併せると、「早」字は、比較的はやい時期からト（シ）と読まれることもあり、『河海抄』『仙源抄』の成立当時は「舌早」を、おそらくシタドと読ませたものと考えられ、『源氏綱目』は、その記述を受け継いだものとする事ができるであろう。これら以外に「舌早」の文字は、後代の注釈『休聞抄』『孟津抄』『岷江入楚』『萬水一露』『湖月抄』などに例を見出だし得るが、各々附訓がみられない。したがって、これら附訓されなかった「舌早」についてはシタドと読まれたか否かは定かではない。おそらく上記の注釈『松永本花鳥余情』『孟津抄』『岷江入楚』『源氏綱目』『萬水一露』にみられるようにシタハヤ・シタバヤと読ませた可能性もあるのではなからうか。

以上のことから推測すると、当初「舌早」は、シタドと読まれていたものであったが、やがて、附訓されない「舌早」が用いられるにしたがって、シタハヤ・シタバヤと読まれるようになって、シタハ（バ）ヤの成立が促されたものと考えられる。もちろんその背景には、トシが次第に古語として意識されるようになり、新たな語形を生み出す素地が整えられていたことと、中古からすでにみられる類義語クチハヤ（シ）に、語義の一部で重なるクチト（シ）があったという関係から類推がはたらいで、シタドに対応する語形としてシタハヤなる語形が成立しやすい環境にあったことを前提として考えておく必要がある。

いずれにせよ、ここで扱った『源氏物語』古注釈のなかでは『松永本花鳥余情』（文明四年十二月）に「したはやに」と記され、『孟津抄』『岷江入楚』『源氏綱目』『萬水一露』において、「舌はやに」「舌ばやに」の記述がみられるところから、室町中期の頃には、「早口である」意を表わす場合にシタドシ（ニ）以外に、シタハヤニあるいはその連濁形シタバヤニがおこなわれていたことは確かである。

四

以上、古代から、江戸初期までにみられるクチトシの周辺語について、偏在的に点として史上に散見される用例をもとに検討してきた。その結果、クチトシには、古代から中世にかけてやはり「早口」の例は見出し得ず、和文資料あるいはその注釈書のなかでは「返歌・消息などの受け答えの早さ」を主に表す場合に用いられたこと。「軽率に口外する」意の例は主に説話などの資料にみられること。一方、中世に入ると「早口」の意を表す語形にはシタド・クチハヤの他に新たにハヤクチが加わり、また、シタハヤニも現れるようになること。さらに、シタハヤの成立については、シタドが古語として意識されるようになり新たな語形が要請されたことにもよるが、中古からみられるクチドークチハヤの関係によ

り、類推的にシタドに対応する語形としてシタハヤがもとめられたこと。また、その過程については、例えば源氏古注釈などにみられる「舌早」にもともとシタト・シタドの訓があったが、附訓されない「舌早」表記がおこなわれるにしたがつて、シタハヤなる語形の成立が促された様子が推測されることなどを考察してきた。なおここでは江戸後期から明治期の様相について触れなかったが、それについては、後稿を期することになる。

(注1) 『観智院本類聚名義抄』にはクチトシの対義語クチオソシが「櫓」の和訓として記載されている。この他に、クチオモシも古からみられ、近世に入ってから「口利」の表記から連想されたものと考えられるクチニブシなどが用いられているが、このような対義関係については、本稿では扱わない。

(注2) 「諺」字にクチカロシの訓がみられるものとして、時代は下るが、中世の『温故知新書』をあげることができる。しかしながら、そこには、クチトシの附訓はみられない。

(注3) 中田祝夫氏は、『恵空編節用集大全研究並びに総合索引』の「自序」において、この書の特徴として「すべての見出し語に読み仮名を附し、清濁も詳しく区別している」とされ、また、「恵空は正式に叡山に学んだ学僧であるから、その読み方には伝統的なものも多く、天台僧が残した伝統ある読み方が、正確に観察できる」と述べておられる。

(注4) この部分については享保六年版絵入刊本において口トではなく口ガルクの異文をもつのがみられる。

(参考文献)

- 有川武一校訂『増補源氏物語湖月抄』昭和二年(弘文社)
池田亀鑑編『源氏物語大成卷七資料編』昭和三二年(中央公論社)
阪倉篤義『語構成の研究』昭和三九年(角川書店)
三谷栄一・関根慶子『日本古典文学大系 狭衣物語』昭和四〇年(岩波書店)
京都大学国語国文学研究室編『天治本新撰字鏡(増訂版)』昭和四二年(臨川書店)
玉上琢彌編『源氏物語評釈 河海抄』昭和四三年(角川書店)

- 阿部秋夫・秋山虔・今井源衛編『日本古典文学全集 源氏物語一―六』昭和四五―五一年（小学館）
- 中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』昭和四五年（風間書房）
- 中田祝夫編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』昭和四六年（風間書房）
- 中田祝夫編『惠空編節用集大全研究並びに総合索引』昭和五〇年（勉誠社）
- 馬淵和夫監修『今昔物語集文節索引 卷第一―卷第三』昭和五一―五六年（笠間書院）
- 東京大学総合図書館編『『洒竹文庫連歌俳諧集成 No. 八一 匠材集』昭和五五年（雄松堂書店）
- 泉 基博編『十訓抄本文と索引』昭和五七年（笠間書院）
- 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』昭和六五年（岩波書店）
- 伊井春樹編『源氏物語古注集成一 松永本花鳥余情』昭和五三年（桜楓社）
- 伊井春樹編『同七 内閣文庫本細流抄』昭和五五年（桜楓社）
- 野村精一編『同四―六 孟津抄』昭和五五年（桜楓社）
- 中田武司編『同一―一五 岷江入楚』昭和五五年（桜楓社）
- 伊井春樹編『同一〇 源氏綱目』昭和五八年（桜楓社）
- 伊井春樹編『同二四―二八 萬水一露』昭和六三年（桜楓社）
- 井爪康之編『同二二 休聞抄』平成七年（桜楓社）

* 引用した例文は読解の便を考慮して適宜改めたところがある。